The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期仏典における断滅論の諸相
Author(s)	畑, 昌利
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2002, 36, p. 33-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5095
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期仏典における断滅論の諸相

畑　　昌利

はじめに

断滅論(ucchedavāda)とは、生物が死後、断ち切られ消滅すること(=断滅)を主張する説であり、仏典やジャイナ教文献で異見として伝えられる。本稿では、初期仏典の中のPāli聖典を主な資料として、1. 断滅論に対する仏教の評価、2. 断滅論と仏教との違い、についてそれぞれ考察してみる。

1. 断滅論に対する仏教の評価

(1.1) DN第二経のSāmaññaphalasutta(=Sphs)中には、六人の外道思想家（六師外道）が登場する。そして、彼らの中で三番目に登場するAjita Kesakambalinの説が断滅論と称される。

> n' atthi mahārāja dinnaṃ n' atthi yiṭṭhaṃ n' atthi hutaṃ, n' atthi sukaṭadukkaṭānaṃ kammānaṃ phalaṃ vipāko, n' atthi ayaṃ loko n' atthi paro loko, n' atthi mātā n' atthi pitā, n' atthi sattā opapātikā, n' atthi loke samaṇabrāhmaṇā sammaggatā sammāpaṭippannā ye imañ ca lokaṃ parañ ca lokaṃ sayaṃ abhiññā sacchikatvā pavedenti. cātummahābhūtiko ayaṃ puriso, yadā kālaṃ karoti paṭhavī paṭhavikāyaṃ anupeti anupagacchati, āpo āpokāyaṃ anupeti anupagacchati, tejo tejokāyaṃ anupeti anupagacchati, vāyo vāyokāyam anupeti anupagacchati, ākāsam indriyāni saṅkamanti. āsandipañcamā purisā mataṃ

ādāya gacchanti, yāva aḷāhanā padāni paññāpenti, kāpotakāni aṭṭhīni bhavanti, bhassantāhutiyo. dattupaññattaṃ yad idaṃ dānaṃ, tesaṃ tucchaṃ musā vilāpo ye keci atthikavādaṃ vadanti. bāle ca paṇḍite ca kāyassa bhedā ucchijjanti vinassanti, na honti param maraṇā.

「大王よ、布施されたものは存在しない。(祭式で) 祀られたものは存在しない。献供されたものは存在しない。良い行為・悪い行為の業の結果や報いは存在しない。この世は存在しない。向こうの世は存在しない。母は存在しない。父は存在しない。(父母無く) 再生する存在の諸衆生 1) は存在しない。この世と向こうの世 (の存在) を自ら通達し、目の当たりにした後に (人に) 知らしめるような、正しく行い・正しく実践した沙門又は婆羅門は世に存在しない。この人間というものは、四大要素から成り、臨終時に、地は地の集合に入り・没入し、水は水の集合に入り・没入し、火は火の集合に入り・没入し、風は風の集合に入り・没入し、諸感覚器官は虚空に移動する。棺を第五とする (四人の) 人々は死体を連れて行き、火葬場まで (その死者を讃える) 諸々の語を知らしめる。鳩色をした骨骨が現れ、献供されたものは灰と帰す。この布施というものは愚者の説であり、誰であれ、(布施されたもの等が) 存在するという主張を説く者達のおしゃべりは、空虚であり偽りだ。愚者も賢者も身体の崩壊によって断ち切られ、消滅し、死後は生じない。」(DN I, p. 55, ll. 15-31)

従来指摘されている通り 2)、この説は内容上次の様に二分できる。即ち、i) 布施や善悪業等十種の存在の否定 [natthikavāda (=nv)]、ii) 唯物論とでもいうべき、四大要素説に基づく断滅論 [ucchedavāda (=uv)] である。Sphs では i),ii) を総称して uv とするが、有部律中のパラレル 3) では、非存在性 (nāstitā) の主張 (即ち nv) とされ、説全体の解釈が異なる。

ところで、Sphs では一人の見解として挙げられている nv, uv が、他経で

はしばしば別個に登場する。そこで、以下にnv［1. 2］, uv［1. 3］の用例を別々に挙げ、両見解に対する仏教の立場を見てみる。

（1. 2） Pāli聖典中において、nvはその正反対の説であるatthikavāda（=av）と対になって登場することが多い[4]。例えば、MN第六十経のApaṇṇakasuttaでは、nvが邪見（micchādiṭṭhi）と、avが正見（sammādiṭṭhi）と称され、後者が仏教から称賛される。同様に、nvはしばしば邪見として取り扱われ[5]、その結果、nvが十不善業道中の邪見として、反対のavが十善業道中の正見として挙げられるようになる[6]。これらの文脈では、十不善を行なう者は地獄へ、十善を行なう者は天界へ生まれ変わるとされ、仏教が輪廻を前提とした世俗の立場でavを認めていたことが分かる。また、nv, avが八聖道中の正見と比較される例も見つかる。

katamā ca, bhikkhave, micchādiṭṭhi? n' atthi dinnam, —; ayaṃ, bhikkhave, micchādiṭṭhi.「そして比丘達よ、どれが誤った見解でしょうか。『布施されたものは存在しない。……』比丘達よ、これが誤った見解です。」

katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi? sammādiṭṭhiṃ p' ahaṃ, bhikkhave, dvayaṃ vadāmi. atthi, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā puññabhāgiyā[7] upadhivepakkā; atthi, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā anāsavā lokuttarā maggaṅgā. katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā —? atthi dinnaṃ,—; ayaṃ, bhikkhave, sammādiṭṭhi sāsavā —.「そして、比丘達よ、どれが正しい見解でしょうか。比丘達よ、私は正しい見解も二種あると説きます。①比丘達よ、流入を伴い・福徳の配分に与り・付属物を報いとしてもつ正しい見解が存在します。②比丘達よ、聖者のものであり・流入を持たず・超世俗であり・（八聖）道の支分である正しい見解が存在します。①比丘達よ、どれが流入を伴い……正しい見解でしょうか。『布施されたものは存在する。……』比丘達よ、これが流入を伴い……正しい見解です。」

katamā ca, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā —? yā kho, bhikkhave, ariyacittassa anāsavacittassa ariyamaggassa samaṅgino ariyamaggaṃ bhāvayato paññā paññindriyaṃ paññābalaṃ dhammavicayasambojjhaṅgo sammādiṭṭhi maggaṅgā,—ayaṃ, bhikkhave, sammādiṭṭhi ariyā —.

「②そして比丘達よ、どれが聖者のものであり……正しい見解でしょうか。比丘達よ、聖者の心を持ち、流入のない心を持ち、（八）聖道を具え、（八）聖道を修習しつつある者の智慧・智慧の能力・智慧の力・ダルマを決択するという完全な悟りの支分であり、（八聖）道の支分である正しい見解、比丘達よ、これが聖者のものであり……正しい見解なのですよ。」(MN III, p. 71f.)

先の用例同様、av は正しい見解として紹介され、更に「福徳の配分に与る」と評される[8]。反対に、「(煩悩や業物質の) 流入を有する[9]」と貶められるのは、十善と称賛されるといえども、果報をもたらす業を作っているにほかならないからであり[10]、仏教が世俗の立場で av を認めつつも、それを越える超世俗の立場で八聖道を主張していたことが分かる[11]。

(1. 3) 次に uv についての資料を見てみる。DN 第一経の Brahmajālasutta (＝Bjs) では、7種の uv が伝えられる。

"yato kho bho ayaṃ attā rūpī cātummahābhūtiko mātāpettikasambhavo, kāyassa bhedā ucchijjati vinassati, na hoti param maraṇā, ettāvatā kho bho ayaṃ attā sammā samucchinno hotīti." itth' eke sato sattassa ucchedaṃ vināsaṃ vibhavaṃ paññāpenti.「『ちょっと君、このアートマンは、形を持ち、四大要素から成り、母と父に属するものの結合より成っており、身体の崩壊により断ち切られ、消滅し、死後は生じないのだよ。だから君、このアートマンは、この限りにおいてまさしく完全に途切れたものとなるのだよ。』と。以上の様に、ある者達は、存在する'satta'[12]が断滅し、消滅し、無くなることを説きます。」(DN I, p. 34, ll. 6-11)

アートマンが四大要素からなり、身体の崩壊後は断滅する、という記述はSphsのuvに一致する。しかしこの後、6種のuvが説かれ、uvとはアートマンの物質・非物質に関わらず、その断滅を説く説であり、必ずしも唯物論とは結び付かないことが明らかになる。また、uvが永続論(sassatavāda)と対比して挙げられる用例も見つかる。

bhavārāmā bhikkhave devamanussā bhavaratā bhavasammuditā, tesaṃ ①**bhavanirodhāya dhamme desiyamāne** cittaṃ na pakkhandati na pasīdati na santiṭṭhati nādhimuccati, evaṃ kho bhikkhave oliyanti eke.

「比丘達よ、神々や人間達が生存への喜びを持っており、生存を喜んでおり、生存に歓喜していると、①**生存の封閉のために法が示されても**、彼らの心は前進せず、澄み渡らず、確立せず、そこに向かって放たれません。比丘達よ、以上の様にある者達は留まるのですよ。」

— bhaven' eva kho pan' eke aṭṭiyamānā harāyamānā jigucchamānā vibhavam abhinandanti, ②**yato kira bho ayaṃ attā**[13] **kāyassa bhedā param maraṇā ucchijjati vinassati na hoti param maraṇā**, etaṃ santaṃ etaṃ paṇītaṃ etaṃ yathāvan ti, evaṃ kho bhikkhave atidhāvanti eke. 「……ところで、ある者達はほかならぬ生存によって嫌になり、恥ずかしくなり、嫌離し、非存在化を欣喜するのですよ。『②**ちょっと君、このアートマンは身体の崩壊によって死後は断ち切られ、消滅し、死後は生じないので**、これは静まりかえっており、これは勝れており、これは如実なのであるとよ。』と。比丘達よ、以上の様にある者達は走り過ぎるのですよ。」(It 2. 2. 12)

太字部②はBjsのuvよりの引用であると考えられるので、ここでいう「走り過ぎる者達」とは断滅論者のことである。また、註釈やVismはこの記述について、留まるのが永続論者であり、走り過ぎるのが断滅論者で

あると説明する[14]。太字部①にも表われているように、仏教の教えというものは現世へ執着する永続論を捨て、生存の停止を目指すものであるが、中途で止まらないで、端まで行ってしまえば、断滅論に陥ってしまうのである[15]。そして仏教は、これら永続論とuvを極端として等しく斥けるが[16]、両説に対する態度が異なる用例も存在する。

ahañ c' Ānanda Vacchagottassa paribbājakassa atth' attā ti puṭṭho samāno atth' attā ti vyākareyyaṃ, ye te Ānanda samaṇabrāhmaṇā sassatavādā tesam etaṃ saddhim abhavissa. ahañ c' Ānanda Vacchagottassa paribbājakassa n' atth' attā ti puṭṭho samāno n' atth' attā ti vyākareyyaṃ, ye te Ānanda samaṇabrāhmaṇā ucchedavādā tesam etaṃ saddhim abhavissa.「アーナンダよ、私が行脚の修行者ヴァッチャゴッタに『アートマンは存在するのか。』と問われて、もし『アートマンは存在する。』と答えるならば、アーナンダよ、これは永続論者である沙門、又は婆羅門達全員のと同じになるでしょう[17]。アーナンダよ、私が行脚の修行者ヴァッチャゴッタに『アートマンは存在しないのか。』と問われて、もし『アートマンは存在しない。』と答えるならば、アーナンダよ、これは断滅論者である沙門、又は婆羅門達全員のと同じになるでしょう。」

ahañ c' Ānanda Vacchagottassa paribbājakassa atth' attā ti puṭṭho samāno atth' attā ti vyākareyyaṃ, api nu me tam anulomam abhavissa ñāṇassa uppādāya [18] sabbe dhammā anattā ti. no h' etam bhante. ahañ c' Ānanda Vacchagottassa paribbājakassa n' atth' attā ti puṭṭho samāno n' atth' attā ti vyākareyyaṃ, sammuḷhassa Ānanda Vacchagottassa bhiyyo [19] sammohāya abhavissa ahu vā me nūna pubbe attā, so etarahi n' atthīti.「アーナンダよ、私が行脚の修行者ヴァッチャゴッタに『アートマンは存在するのか。』と問われて、もし『アートマンは存在する。』と答えるならば、それは私にとって、『すべてのダルマはアー

トマンでない。』という知識の生起に相応しくなるでしょうか。尊師よ、決して相応しくなりません。アーナンダよ、私が行脚の修行者ヴァッチャゴッタに『アートマンは存在しないのか。』と問われて、もし『アートマンは存在しない。』と答えるならば、アーナンダよ、愚昧なヴァッチャゴッタに『私には以前アートマンが存在したが、現在は存在しない。』という更なる愚昧さをもたらすでしょう。」(SN IV, p. 400, l. 25-p. 401, l. 10)

永続論に相当する主張は、仏説と矛盾するという理由で排除される一方、uv 相当の主張は、ヴァッチャゴッタが混乱するという理由で排除される。この記述は、仏説は uv に近かったのではないか、という推察を引き起こす。そして、その推察は次の資料からも保証される。

etad aggaṃ bhikkhave bāhirakānaṃ diṭṭhigatānaṃ, yad idaṃ 'no c' assaṃ, no ca me siyā, na bhavissāmi, na me bhavissatī'ti. evaṃdiṭṭhino bhikkhave etaṃ pāṭikaṅkhaṃ: yā cāyaṃ bhave appaṭikulyatā, sā c' assa na bhavissati, yā cāyaṃ bhavanirodhe pāṭikulyatā, sā c' assa na bhavissatīti.「比丘達よ、外道達の諸見解の中で、①『私は存在し得ず、私に属するものは存在し得ない。私は生じないだろうし、私に属するものは生じないだろう。』というこれ、これが最高です。比丘達よ、この様な見解をもつ者には、次の様なことが期待されます。②『生存に対するこの気が進まないことはないこと、それはこの者には生じないだろうし、生存の封閉に対するこの気が進まないこと、それはこの者には生じないだろう。』と。」(AN V, p. 63f.)

註釈や他経の記述より、①『　』内の見解は uv と比定される[20]。即ち、uv は仏教から、外道の説の中で最良の説と評価されていたことになる[21]。さらに、この見解は、AN IV, pp. 70-74では七種の不還についての記述に、Ud 7. 8では Mahākaccāyana に関する仏陀のウダーナに含まれ、仏陀によって好意的に評価されていることが分かる。また、②『　』内で、断滅

論者が、仏教における目標であるbhava-nirodhaに気が進まないことはない、とあることも、断滅論が仏教に近似していることを示す。

(1. 4) 1.1-3を纏めておく。Sphsの Ajita 説はnvとuvに分けられ、仏教は世俗の立場では、nvと正反対の説のavを承認する。しかし、avに含まれる生天思想は、超世俗の立場から見れば永続論へと陥りかねず、現世への執着を捨てたuvが、仏教から一定の評価を受けたと考えられる。

2. 断滅論と仏教の違い

1.3で引用したIt 2. 2. 12の太字部①に、仏教のダルマはbhava-nirodha(=bhn)のために示されるという記述を見た。他経では、bhnがnibbānaと言い換えられ、相当する註釈はbhavaを五蘊と説明する[22]。そこで以下に、仏陀によって排されたuvと、採用されたbhnとの違いを考察する[23]。

(2. 1) まず、仏陀が断滅論者と自称する例を見てみる。

atthi khv esa brāhmaṇa pariyāyo, yena maṃ (pariyāyena sammā vadamāno vadeyya) 'ucchedavādo samaṇo Gotamo' ti. ahaṃ hi brāhmaṇa **ucchedaṃ** vadāmi **rāgassa dosassa mohassa anekavihitānaṃ pāpakānaṃ akusalānaṃ dhammānaṃ ucchedaṃ** vadāmi. ayaṃ kho brāhmaṇa pariyāyo (yena maṃ pariyāyena sammā vadamāno vadeyya 'ucchedavādo samaṇo Gotamo' ti,) no ca kho yaṃ tvaṃ sandhāya vadesi. [24]「婆羅門よ、それを使って私のことを正しく語るような、次の様なヴァリエーションが存在するのだよ。『沙門ゴータマは断滅論者である。』と。というのも、婆羅門よ、私は、**激情・憎しみ・蒙昧の断滅**を説き、**さまざまな悪しき不善の諸ダルマの断滅**を説くからである。婆羅門よ、これが、…(訳省略)…ヴァリエーションであり、君がそれを意図して言ったものではないのだよ。」(Vin III, p. 2, l. 34-p. 3, l. 1≠AN IV, p. 183)

ここでは、仏陀が説いた断滅とは三毒等の諸悪法の断滅であったとされる。また他経では、激情と関係の強い渇愛(taṇhā)の切断も説かれる[25]。仏教において断たれるべきものはこれら三毒や渇愛であるが、外道が勘違いをして、仏陀を断滅論者と批判していたことが分かる[26]。

(2. 2) SN 22.85では、ヤマカ比丘が次のような誤った見解を抱く。

khīṇāsavo bhikkhu kāyassa bhedā ucchijjati vinassati na hoti paraṃ maraṇā「流入の滅した比丘[27]は、身体の崩壊により断ち切られ、消滅し、死後は生じない」(SN III, p. 109, ll. 20-22)

舎利弗の説法を受けたヤマカ比丘は、経中で次の様な正しい見解を得る。

yo so āvuso Yamaka bhikkhu arahaṃ khīṇāsāvo so kāyassa bhedā paraṃ maraṇā kiṃ hotīti evam puṭṭho 'ham āvuso evaṃ vyākareyyam. rūpo kho āvuso aniccaṃ. yad aniccaṃ taṃ dukkham. yaṃ dukkhaṃ taṃ niruddhaṃ tad atthagataṃ. vedanā saññā saṅkhārā viññāṇam aniccaṃ. yad aniccaṃ taṃ dukkhaṃ. yaṃ dukkhaṃ taṃ niruddhaṃ tad atthagatan.「『友ヤマカよ、阿羅漢であり、流入の滅したその比丘は、身体の崩壊により、死後、何になるのですか。』と、このように問われたなら、友よ、私は次の様に答えるでしょう。『友よ、物質は永遠でないのですよ。永遠でないものは苦しみです。苦しみであるものは、封閉されており、消えています。…(感受作用・表象・形成作用・認識も同様)…。』」(p. 112, ll. 19-23)

流入の滅した阿羅漢が死後断滅することが誤った見解と断じられ、正しい見解として、物質等の五蘊の封閉が述べられる。そして、この箇所の「封閉」には、2. 1に見たuccheda ではなく、atthagama という語が併用される[28]。さらに、封閉と atthagama は、他経で次の様にも併用される。

yo bhikkhave cakkhussa uppādo ṭhiti abhinibbatti pātubhāvo dukkhass' eso uppādo rogānaṃ ṭhiti[29] **jarāmaraṇassa pātubhāvo.** — yo

ca kho bhikkhave cakkhussa nirodho vūpasamo atthagamo dukkhass' eso nirodho rogānaṃ vūpasamo **jarāmaraṇassa atthagamo**.

「比丘達よ、目の登場、滞在、転現、現前、これは苦の登場、諸病の滞在、**老死の現前**である。……そして、比丘達よ、目の封閉、静止、消滅、これは苦の封閉、諸病の静止、**老死の atthagama** なのだよ。」(SN IV, p. 14, ll. 8-18)

atthagama の対義語として、「現前」(pātubhāva)が使われており[30]、atthagama は消滅するのではなく、不可視化を意味することが分かる。従って、先の SN22. 85で、修行完成者の死後の境地としてatthagataと併用された五蘊の封閉とは、五蘊の不可視化と近似する概念であると推測できる。

(2. 3) 纏めとして、修行完成者の封閉についての記述を二例見てみる。

seyyathā pi, bhikkhave, ambapiṇḍiyā vaṇṭacchinnāya yāni kānici ambāni vaṇṭūpanibandhanāni, sabbāni tāni tadanvayāni bhavanti, evam eva kho, bhikkhave, ucchinnabhavanettiko tathāgatassa kāyo tiṭṭhati. yāv' assa kayo ṭhassati tāva naṃ dakkhinti devamanussā. kāyassa bhedā uddhaṃ jīvitapariyādānā na dakkhinti devamanussā

「比丘達よ、例えばマンゴーの実の房の茎が切られたことより、茎につながっていたどのマンゴーも、すべてそれに従うものとなるように、ほかならぬこのように、比丘達よ、修行完成者の身体は存在へと導くものが断ち切られたまま、留まっているのですよ。彼の身体が留まるであろう限り、神々や人間達はこれを見るでしょう。身体の崩壊により、命が尽き果てた後は、神々や人間達は(これを)見ないでしょう。」(DN I, p. 46, ll. 13-18)

註釈は bhavanetti を taṇhā と説明する[31]。渇愛が切られている tathāgata は、身体の崩壊後は見えなくなるという記述は、先挙の SN22. 85の、修行完成者の五蘊が attha(ṃ)-√gam するという表現と一致する。

Sn vv. 1074-1076

accī yathā vātavegena khitto Upasīvāti bhagavā atthaṃ paleti na upeti saṃkhaṃ,/

evaṃ munī nāmakāyā vimutto atthaṃ paleti na upeti saṃkhaṃ//

「『ウパシーヴァよ』と世尊（は言った、）『風のうねりによって投げられた炎が、消え、言説に至らない様に、このように沈黙の聖者は名称としての身体より放たれており、消え、言説に至りません。』」

atthaṅ gato so uda vā **so n' atthi udāhu ve sassatiyā arogo**,/

tam me munī sādhu viyākarohi, tathā hi te vidito esa dhammo.//

「『消えてしまった彼は、**存在していないのか、あるいはまた永続性を用いて損なわれずにいるのか**、沈黙の聖者よ、それを私に宜しく説明して下さい。というのも、この真理は君によってその様に知られているからです。』」

atthaṅ gatassa na pamāṇam atthi, Upasīvāti bhagavā yena naṃ vajju, taṃ tassa n' atthi,/ sabbesu dhammesu samūhatesu samūhatā vādapathā pi sabbe ti 「『消えてしまった者には基準が存在しません。ウパシーヴァよ、』と世尊（は言った、）『それを使って人々が彼のことを語る、それが彼には存在しません。すべてのダルマが取り出されている時、すべての言葉のはたらく道も取り出されているのです。』と。」

太字部の様に、永続か断滅かと問われた世尊は、消えてしまった者(atthaṅ gata)[32] には基準が存在しない、と答えるのみである[33]。そして、この点が uv と仏教の違いであると言える。即ち、uv は修行完成者が死後断滅することを説く。一方、仏教は死後見えなくなるところまでは述べるが、その後どうなるかについては語らないという違いである。

おわりに

初期仏典に伝えられる uv は、従来解されていた様な、仏教から最も忌

避された見解ではなく、寧ろ現世からの離脱を願う点で、仏教からある程度評価されていた見解である。しかし、仏教はuvを異見として排除し、It 2. 2. 12では断滅論者を「走り過ぎ」とけなす。それは、修行完成者の死後についての言語的表現を自重し、言わば「中途に留まった」仏教から見て、死後の断滅を口にした断滅論者は「走り過ぎ」ていたことを示し、死後に関する仏教の微妙な立場をよく表わしていると言える。

＊引用したPāli文献は、原則的にPāli Text Society版を使用したが、場合に応じてタイ版(*The Buddhist Scriptures*, [on CD-ROM, version IV], (Mahidol University Computing Center, Bangkok) 1994)、ミャンマー版(*Chaṭṭha Saṅgāyana*, [on CD-ROM, version III], (Vipassana Research Institute) 2000)を使用した。

また略号は、*A Critical Pāli Dictionary*(=CPD), begun by V. Trenckner, revised, continued and edited by D. Andersen and H. Smith et al., (Copenhagen) 1924-のEpilegomenaにしたがった。

註

1) comm.: *n' atthi sattā opapātikā* ti cavitvā **upapajjanakā sattā** nāma n' atthīti vadati.「n' atthi sattā opapātikā とは、逝った後に生じるものである衆生というものは存在しないと言っている。」(DN-a I, p. 165, ll. 23-25；タイ版・ミャンマー版より、太字部底本uppajanaka-sattāを訂正。) opapātikāについては、大西啓一「化生の本義 ― 仏教における自然概念の一側面―」(2002年度日本佛教学会学術大会発表) も参照。

2) 雲井昭善『仏教興起時代の思想研究』(平樂寺書店) 1967, pp. 66-71；C. Vogel, *The Teachings of the Six Heretics: According to the Pravrajyāvastu of the Tibetan Mūlasarvāstivāda Vinaya*, (Wiesbaden) 1970.

3) R. Gnoli (ed.), *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu*, part II, (Roma) 1978, p. 221.

4) Cf. 雲井前掲書, pp. 68-70； 茨田通俊「断滅論 (ucchedavāda) につい

て」『印度学佛教学研究』43-1 (1994), pp. (102)-(105).

5) DN III, p. 264f., AN IV, p. 226では、邪な見解を持つもの(micchādiṭṭhika)の見解として、nv が挙げられる。Kv, p. 149も参照。

6) MN I, p. 287 (10種の manasā adhammacariya visamacariya の1として)；MN III, p. 22；AN V, p. 265等。Cf. P. Pradhan (ed.), *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, (Patna) 1975, p. 247f.

7) 底本：puññābhāgiyā であるが、タイ版・ミャンマー版より異読を採用。

8) このように評価されるのは、av と仏説とに一致する点があったから、と考えられる。例えば、先挙の Apaṇṇakasutta では、仏陀によって「向こうの世」の存在が認められる。**santaṃ yeva kho pana paraṃ lokaṃ**: n' atthi paro loko ti 'ssa diṭṭhi hoti, sā 'ssa hoti micchādiṭṭhi.「ところで実に向こうの世界は存在するのに、彼には『向こうの世界は存在しない。』という見解が生じ、それは、彼にとって邪な見解となるのですよ。」(MN I, p. 402, l. 23f.) また、DN 第二十三経の Pāyāsisutta では、仏弟子 Kumāra Kassapa が「向こうの世」「善悪業の果報」「sattā opapātikā」について atthika の立場をとっている。

9) 仏教において āsava が煩悩の流入だけでなく、ジャイナ教同様、業物質の流入も意味する事については、榎本文雄「初期仏典における āsrava (漏)」『南都仏教』50 (1983), pp. 17-28を参照。

10) AN V, p. 288, ll. 27-29では av を正見とする十善業道を挙げた後に、次の様に説明される。kammassakā bhikkhave sattā kammadāyādā kammayonī kammabandhū kammapaṭisaraṇā, yaṃ kammaṃ karonti kalyāṇaṃ vā pāpakaṃ vā, tassa dāyādā bhavanti.「比丘達よ、諸衆生は業を所有物としており、業を相続物として受け取り、業を出所としており、業を親族としており、業に寄り掛かっているのであり、善でも悪でも業を作れば、それを相続物として受け取る者達となるのである。」

11) SN 42.13.44 (vol. IV, p. 351f.) では、十善業道を実践する、貴い人の弟子が、nv や av に左右されずに、正しい禅定を手に入れると説かれる。

12) Franke は、この箇所の'satta'は'atta'と同義であると説明する。(Cf. O. Franke, *Dīghanikāya: Das Buch der langen Texte des buddhistischen Kanons*, (Göttingen) 1913, p. 36, n. 3.)

13) 底本には attho とあるが、タイ版・ミャンマー版・註釈より異読を採用。

14) It-a I, p. 177, l. 31-p. 178, l. 9；Vism, p. 594, ll. 5-16

15) 従って、永続論者から見れば、仏説は uv に見える。Cf. MN I, p. 136.

16) ete te Kassapa ubho ante anupagamma majjhena tathāgato dhammam deseti.「カッサパよ、修行完成者はそのようなこれら（永続・断滅）の両極端に近づかず、真ん中を通ってダルマを示します。」(SN II, p. 20)

17) atth' attā と答えれば永続論者になる理由は定かでない。atta という語に「永続するもの」という意味が含まれているのか、或は√as に「存続する」の意味を認めるべきか。本稿では問題提起に留める。

18) 底本は upādāya であるが、註釈の記述(SN-a III, p. 115)・タイ版・ミャンマー版より異読を採用。Cf. CPD s.v. uppāda.

19) タイ版・ミャンマー版より、底本 bhīyyo を訂正。

20) comm.: *agge virajjatīti* ucchedadiṭṭhiyaṃ virajjati. ucchedadiṭṭhi hi idha nibbānassa **santikattā** aggan ti jātā.「'agge virajjati'とは、断滅論に対して冷めるのである。というのも、断滅論は、この場合涅槃に近いことより、最高として生じているからである。」(AN-a V, p. 27, ll. 5-6；太字部底本は santatāya であるが、異読を採用。)
na h' eva kho rūpaṃ attato samanupassati,— api ca kho evaṃ diṭṭhi hoti no ca assaṃ no ca me siyā na bhavissāmi na me bhavissatīti. yā kho pana sā bhikkhave ucchedadiṭṭhi saṅkhāro so.「実に物質をアートマンと看做さなくとも、……しかしながら、見解は次のようになるのですよ。『私は存在し得ず、私に属するものは存在し得ず、私は生じないだろうし、私に属するものは生じないだろう。』と。ところで、比丘達よ、その断滅の見解は即ち形成作用なのですよ。」(SN III, p. 98f.)

21) 茨田通俊氏は、Pāli 聖典中の永続論に関する記述を集め、仏教は断滅論よりも永続論に対して好意的であった、と結論付ける。(Cf. 茨田通俊, "On *sassatavāda* —In Comparison with *ucchedavāda*—"『印度学佛教学研究』44-2 (1996), pp. (19)-(22).) しかし、そこで比較されているのは永続論と nv であり、uv と永続論の比較ではない。

22) aññatr' eva āvuso Saviṭṭha saddhāya aññatra ruciyā aññatra anussavā aññatra **ākāra**parivitakkā aññatra diṭṭhinijjhānakhantiyā, aham etaṃ jānāmi aham etaṃ passāmi bhavanirodho **nibbānan** ti.
「友サヴィッタよ、信頼無しに、喜び無しに、伝聞無しに、形相の思考無しに、見解の内省に堪えること無しに、私は次の様に知り、次の様に見ます。『bhavanirodha は nibbāna である。』と。」(SN II, p. 117, ll. 11-14；タイ版・ミャンマー版より、太字部底本 ākara, nibbānam をそれぞれ訂

正。) comm.: *bhavanirodho nibbānan* ti, pañca-kkhandha-nirodho nibbānaṃ.「bhavanirodho nibbānaṃ とは、五蘊の封閉が涅槃であるということである。」(SN-a II, p. 123, l. 1f.)

23) 修行完成者(tathāgata)の nibbāna については、以下の二論文も参照。K.R. Norman, "Death and the Tathāgata" in *Studies in Buddhism and Culture, in Honour of Professor Dr. Egaku Mayeda on His Sixty-Fifth Birthday*, (Tokyo) 1991, pp. (780)-(770); E. Steinkellner, "Lamotte and the Concept of anupalabdhi" *Asiatische Studien*, 46-1 (1992), pp. 398-410. また、nn. 27, 33も参照されたい。

24) ( )内は、底本にて省略される箇所を復元したものである。

25) ucchinnā bhavataṇhā khīṇā bhavanettī n' atth' idāni punabbhavo「生存への渇愛は断ち切られており、生存へ導くものは滅している。今や再生は存在しない。」(SN V, p. 432, l. 7f.)
また、SN 56.11.6-7 では、以下のように渇愛の封閉が説かれる。
idam kho pana bhikkhave dukkhasamudayam ariyasaccaṃ. yāyaṃ taṇhā ponobbhavikā nandīrāgasahagatā tatra tatrābhinandinī, seyyathīdaṃ kāmataṇhā bhavataṇhā vibhavataṇhā. idaṃ kho pana bhikkhave dukkhanirodham ariyasaccaṃ. yo tassā yeva taṇhāya asesavirāganirodho cāgo paṭinissaggo mutti anālayo.「ところで、比丘達よ、次の様なのが苦の生起という、聖者にとっての真実なのですよ。再生に導き、喜びと激情とともに有り、あれそれへと嬉々するようなこの渇愛、即ち、欲望への渇愛、生存への渇愛、非存在化への渇愛です。ところで、比丘達よ、次の様なのが苦の封閉という、聖者にとっての真実なのですよ。ほかならぬその渇愛の、余すところ無く冷めることによる封閉、捨てること、放捨、解放、非愛着です。」(SN V, p. 421, ll. 25-31)

26) 仏陀を断滅論者とする批判については、n. 15の MN I, p. 136も参照。

27) これより後の箇所(p. 112, ll. 5-9)では、この「流入の滅した比丘」は tathāgata と言い換えられる。同様に、他経で「心解脱した比丘」が tathāgata と換言される用例も指摘されている。(榎本文雄「『尊婆須蜜菩薩所集論』所引の阿含の偈をめぐって—tathāgata の原意を中心に—」『渡邊文麿博士追悼記念論集　原始仏教と大乗仏教』上, (永田文昌堂) 1993, pp. 255-269と同論文の nn. 15, 16で挙げられる諸論文を参照。) これらの資料より、本稿では tathāgata を「修行完成者」と訳している。

28) attha(ṃ)-gama. (Skt.: asta(ṃ)-√gam)
asta は元来「家」を意味していたが、ブラーフマナ文献以降では、astam

√iで「日没」を意味し、転じて「消える、死ぬ」という意味が生じる。(Cf. M. Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*(=EWA), Bd. I, (Heidelberg) 1986-1992, s.v. ásta-; PW s.v.) 同様に仏典でも asta(ṃ)-√gam で「日没」と「消滅」の二種類の意味が確認される。(Cf. CPD s.vv. attha-gama, attha-gamana, atthaṃ-gata, atthaṃ-gamita; E. Waldschmidt et al. (eds.) *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Finden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*, (Göttingen) 1994-, s.vv. astaṃ-gata, astaṃ-gam, astaṃ-gama.)

29) タイ版・ミャンマー版より、底本 ṭhītiを訂正。

30) また、pātu (Skt.: prādur)は、語源上、「朝」を意味する prātár との関連も指摘されている。(Cf. EWA, Bd. II, (Heidelberg) 1992-1996, s.v. prātár) すると、pātubhāva: atthagama で日の出：日の入り、という対義関係が意図されているとも考えられる。

31) It 2.2.7では、bhava-netti が壊滅されているのが、有余依涅槃界であり、諸生存が封閉されているのが、無余依涅槃界であると説かれる。そして、この箇所の bhava-netti もtaṇhāと註釈される。(It-a I, p. 167, l. 18)

32) Cf. Muṇḍaka Upaniṣad 3.2.8 (V.P. Limaye & R.D. Vadekar (eds.), *Eighteen Principal Upaniṣads*, vol. I, (Poona) 1958, p. 47)
yathā nadyas syandamānās samudre **astam gacchanti** nāma-rūpe vihāya/ tathā vidvān nāma-rūpād vimuktaḥ parāt-param puruṣam upaiti divyam//
「流れつつある河川が大海のところで名と姿を捨て去り、消える様に、知者は名と姿から放たれ、上へ上へと神的な人格に到達する。」
修行完成者を大海に例える用例については、MN I, pp. 487-488も参照。

33) Norman 前掲論文は tathāgata が「現世で突き止められない」(diṭṭh' eva dhamme ananvejja)と表現されることを指摘した後に、「tathāgata の死後存在については何も述べられない」と結論付けるが、説明が不十分である。Steinkellner 前掲論文が、tathāgata は「知覚されない」(anupalabbha)のであり、存在・非存在は決定できないとするのは、本稿の結論に一致する。

(大学院後期課程学生)

Some Aspects of *ucchedavāda* in Early Buddhist Literature

Masatoshi HATA

In ancient India, there was a theory named *ucchedavāda* (=uv), which denied the rebirth of any living beings. And the adherents of *uv* (*ucchedavādin*s) were treated as heretics by the Buddha.
In this paper, by looking into the *Pāli* Canon, I intend to solve the following questions about *uv*:
(1) How did the Buddha appreciate *uv*?
(2) What was the difference between *uv* and Buddhism?

As for the first question, it has been generally defined that *uv* was the least esteemed theory by the Buddha. But by examining the descriptions about *uv* in the *Pāli* Canon and its commentaries, the opposite conclusion is led. That is, the Buddha esteemed *uv* most highly among heretical theories, because of the fact that both Buddhism and *uv* aimed at the emancipation from this world.

As for the second, in spite of the similarity between Buddhism and *uv*, the Buddha criticized the *ucchedavādin*s by stressing that they overran (*atidhāvanti*). As to the emancipation, the Buddha preached the cessation of existence (*bhava-nirodha*), or the disapearance (*atthagama*) of constituents of existence. But about the state of the released one (*tathāgata*), the Buddha refused to put that into words. On the other hand, the *ucchedavādin*s advocated the extinction of the released one. This is the difference between Buddhism and *uv*. To the Buddha, the *ucchedavādin*s who persisted in the extinction seemed overrun, namely, extreme, and this is why *uv* was cut away by the Buddha.

Keywords : 外道 ucchedavāda 断滅論 nirodha